

「大学生がシカ・イノシシを獲る。」上での課題と解決策について

常葉大学社会環境学部小杉山ゼミ

指導教員：准教授小杉山晃一

参加学生：望月琴乃、平野翔大、小川龍太郎、

竹内友美、小松千紗

連携先：常葉大学 社会環境学部 山田ゼミ

静岡大学 農学部 水永ゼミ

1. 要約

野生動物による被害の拡大と、それを抑制する役割を担っている狩猟者の高齢化という現実に対し、大学生が狩猟者になるためにどのような社会的障壁があるのか、実際の狩猟の現場を体験し、狩猟者の肉声を聞き取り、その障壁を取り除くための大学生ならではの提案をまとめた。

2. 研究の目的

静岡県において、ニホンジカ、イノシシなど野生動物による農林業被害は甚大で、早急な対応策が検討されている。一方で、獣害対策の主力である狩猟者は高齢化が進んでおり、後継者育成は、まさに急務であると言える。本研究は、野生動物の個体数管理を実施する現場で、大学生を中心とした若い世代が狩猟者となって活躍するための課題を明らかにし、継続的に後継者を育成する政策手法を研究・提案することが目的である。

3. 研究の内容

(1) 静岡県におけるシカ・イノシシによる被害の実態

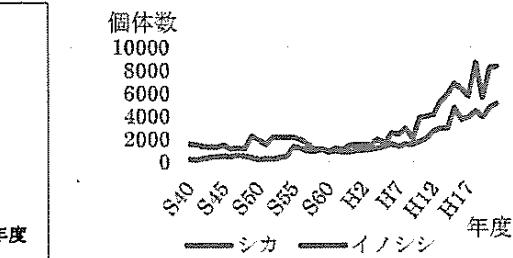
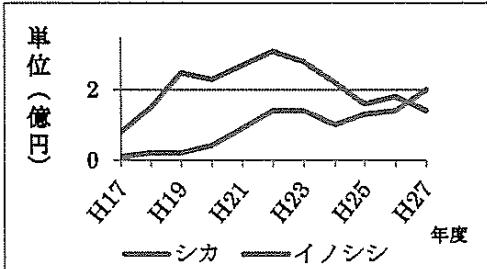


図1 静岡県における被害額の推移

図2 静岡県における捕獲個体数の推移

統計資料などを用いて、野生動物による被害の実態を明らかにした。イノシシによる被害は平成22年度以降3億1千万円から1億4千万円へと減少傾向にあるが、ニホンジカによる被害は増加している。その被害額は平成27年度で1千万円から20倍の2億円に登る。また、主な被害農作物は水稻、サトイモ、サツマイモ、スイカ、ミカンで特用林産物ではシイタケ、ワサビなどが上げられる。

また、図2からシカの捕獲個体数が、昭和40年度から平成21年度までに200頭から5098頭まで増加し、イノシシでは1539頭から8293頭まで増加しているが、これは狩猟者の増加によるものではなく、純粹に個体数が増加していることを示している。環境省等の調査によると、狩猟者が可能な限度まで捕獲してもその増加率を越えることのできないレベルに達していると言われる。

(2) 静岡県における狩猟者の現状

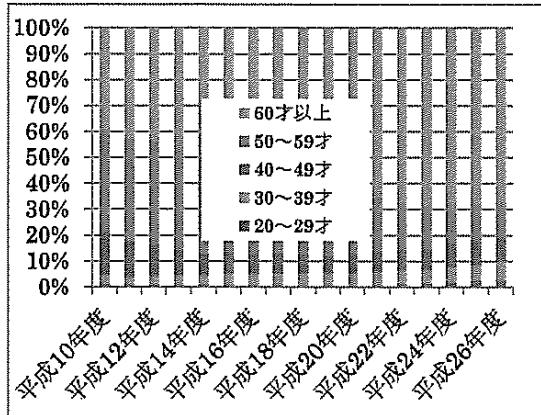


图3 静岡県における年齢別狩猟免許状交付状況

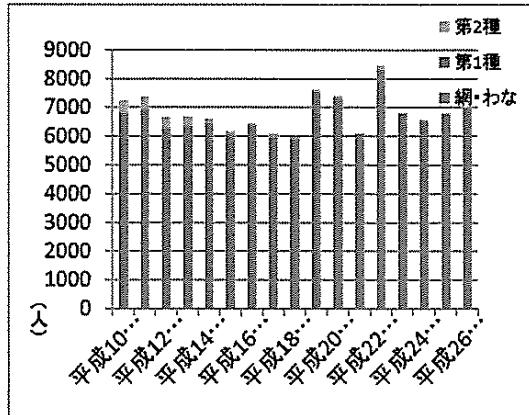


图4 静岡県における種別狩猟免許状交付状況

こうした被害の拡大に対し、图3の通り狩猟者の高齢化は年々進行している。图4では免許取得者が下げ止まりしている（微増している）状況も見受けられるが、狩猟者登録者は減少し、実際に狩猟を行う狩猟者は少ない。現時点でさえ、増加数を超えて捕獲することはできていない。このまま狩猟者が減少し、高齢化が進行すれば、被害は拡大するばかりである。

(3) 大学生による狩猟免許取得及び実獵への参加

下図（表1）の通り、常葉大学ではこれまで多くの大学生狩猟者を輩出してきた。また、林野庁との共同事業「ニホンジカの誘因捕獲」に関わり、NPO法人若葉の協力のもと、出生率の調査などに携わってきた（平成27年度4回、28年度7回、平成29年度5回）。こうした狩猟との密接な関わりの中で、相互に議論を行い、狩猟者と交流する経験を通して、課題の抽出作業を実施した。

表1 常葉大学における狩猟者の育成実績

年度	名前	免許取得時の学年	免許内容	現住所	獣友会	備考
平成26年度	巴 懇紀	3年	鉄	島田市	入っていない	地元富士市の獣友会に入りたい
平成28年度	小松 干紗	2年	わな	富士市	入っていない	実家は長野県
平成28年度	楳	2年	わな	富士市	入っていない	
平成28年度	荒川	2年	わな	富士市	入っていない	実家は掛川市
平成29年度	西塚 荘太郎	4年	わな	藤枝市	入っていない	
平成29年度	小川 龍太郎	3年	わな	富士市	入っていない	実家は茨城県
平成29年度	丹羽 遼通	3年	わな	静岡市	入っていない	
平成29年度	留月 審乃	3年	わな	焼津市	入っていない	
平成29年度	山梨 佐和子	3年	わな	静岡市	入っていない	
平成29年度	竹内 友美	3年	わな	富士市	入っていない	実家は浜松市
平成29年度	平野 翔大	3年	わな	駿東郡長泉町	入っていない	
平成29年度	留月 咲見	1年	わな	富士市	入っていない	

(4) 課題の抽出

大学生が狩猟を行う際に際してどのような課題があるのか、実獵までのプロセスを次のように区分し、課題の抽出を行った。

- ① 管理捕獲への動機付けにおける課題の抽出
- ② 狩猟免許取得における課題の抽出
- ③ 狩猟者登録における課題の抽出
- ④ 実獵への参加における課題の抽出

4. 研究の成果

(1) 開始時に見込まれた研究成果

大学生が狩猟を行う際の具体的な課題を明らかにする。それに基づき、関係行政機関や県獣友会に対し、現行の狩猟免許取得の仕組み等に関する提案を行い、継続的な後継者育成のための新たな仕組みを構築する。

(2) 実際の研究によって得られた成果

① 管理捕獲への動機付けにおける課題の抽出

狩猟者を若い世代に広めるためには、まず被害の深刻さと狩猟捕獲体制の縮小という現実を多くの人に知つてもらう必要がある。そのため、本研究では、「大学生のためのハンター入門講座」(別紙)を開催し、県内の主要な大学に案内を配布し、関心のある大学生に状況を伝える仕組みを考案した。今年度実施した講座は静岡市葵区で行い、静岡大学の学生が12名、常葉大学の学生が4名の計16名が参加した。午前は野生生物による農作被害の現状や鳥獣保護管理法の概要などを聴き、午後は実際にくくりわなを触ったり、鹿肉を食べたり鹿革でクラフト体験をした。参加者からの事後アンケートによれば、反応は上々であった。

② 狩猟免許取得における課題の抽出

大学生が狩猟免許を取得する上で課題と考えられるものは次の通りである。第一に免許取得に係る経費の問題がある。狩猟免許取得に係る経費はアルバイトや親からの仕送りが頼りの大学生にとって大きい。第二に、診断書の取得に戸惑うケースも多いと思われる。診断書は原則、歯科以外の過去に診てもらった病院または精神科で書いてもらうことができる。だがこの診断書を書くことに懸念を持っている医者も一定数おり、断られるケースも少なくない。学校に県外から来て周辺にかかりつけ医を持たない学生は、診断書を書いてもらうためにわざわざ実家に帰ることもあった。診断書を書いてもらうための診察方法に決まりではなく、10分程度の問診のみの場合もあれば、1時間以上かけて尿検査など厳重に身体検査をする場合もある。その為料金もバラバラで、ある学生は診断書取得のため訪れたクリニックで、他のクリニックを訪れた学生の3倍以上の額を請求された。負担の軽減、手続きの簡素化が求められる。また、狩猟を志していても、そのための学習の場が少ないことも問題点として挙げられる。

③ 狩猟者登録における課題の抽出

次に、免許を取得した後の課題について検討した。現在、我々のチームには11人の免許取得者がおり、今シーズンの狩猟者登録を試みた。しかし、実際には誰ひとり登録までこぎ着けた者はいない。その理由は次の通りである。第一に、狩猟者保険の加入である。現時点で、地域獣友会に入会する以外に保険に加入する手段はない。しかし、異なる地域に在住する学生がチームで活動するうえで、ばらばらの獣友会に入会することは大きな不安になる。実獣等で相談に乗って頂いたハンターの方と同じ地区獣友会に入りたいと願っても、入ることを許される獣友会は現住所地の地区的獣友会グループに限定されているため、それも心理的な障壁となっている。もちろん、登録の際の経費負担も学生には大きい。

④ 実獣への参加における課題の抽出

林野庁との共同事業(NPO法人若葉による狩猟)や、有限会社高山興業による指導を受け、実際の狩猟を数回体験した。このような機会は、一般的の大学生にはほとんどなく、狩猟団体に加入せず、自分だけまたは友人たちと一緒に狩猟者になることを試みても、スキルアップすることは困難であろう。登録を済ませた学生が実獣を行うには、入会した地域獣友会のメンバーとして、先輩狩猟者の指導を受けることが重要である。しかし、この部分のハードルが高いと感じている学生が多いと思われる。いきなり実獣ではなく、実技(わな設置から獲物解体まで)を学ぶ場が必要である。狩猟の初心者が心配しなくてはならないことは多いが、準備段階での十分な知識の蓄積が必要である。例えば、怪我をした際の対応方法、ダニ・ヤマビル対策、山中でのトイレの問題、オフロードや雪道での車の扱い、無線の扱い、などである。このような情報は本来、個人の努力により習得すべき事柄ではあるが、今後の普及拡大を考慮すると、事前講習の充実が望まれる。今回の研究により、地域には効果的な狩猟を行うために多くの創意工夫が眠っていることが分かった。これらの多くは狩猟者の個人的工夫であり、それを伝承する場はほとんどない。大学生が指導を受ける場が設けられれば、このような眠っている技術を生かすことも可能になるだろう。

⑤ 各地の参考事例

福岡県では、銃の所持許可を受けられる人限定で銃の取り扱いに関する研修会を実施している。また、獣銃の技能を向上させる研修会は無料で実施されている。静岡県でも狩猟免許に関心のある人のために狩猟免許取得ガイドブックを静岡県公式ホームページに公開していたり、狩猟免許取得のための予備講習会を実施している。千葉県警では、獣銃講習会を実施している。富山県獣友会は、狩猟に興味を持つてもらうための狩猟ガイダンスを無料で実施している。

(3) 静岡県自然保護課及び静岡県獣友会に關係する改善点の提案

狩猟免許に興味がある・取得したい人たちへのイベントを定期的に何度も開催することが重要である。これが市民の間に浸透していくには労力は軽減できるが、継続は重要である。免許取得後の訓練の機会も重要である。学生が気軽に参加し、経験豊富なプロから実技をしっかりと学べる講座に組み立てるには、学生のアイディアが役に立つだろう。保険への加入が大きな障壁のひとつとなっている。また、地域獣友会への入会の縛りも心理的な障壁である。狩猟者登録のハードルを下げるためにも、保険や獣友会組織の改善が必要である。

(4) 今後の研究課題

本研究は、大学生の狩猟に関する諸課題について整理し、その解決策を探るものである。主に狩猟関係者へのインタビュー調査を通じて、課題を抽出した。そのため、一般市民の意見が反映されていない形で報告せざるを得ない状況である。狩猟への参画が、結婚等の生活の障害要素となり得るのか、残念ながら本研究では不透明である。狩猟に無関心な一般市民、特に大学生に対してどのような動機づけを行うのか、今一度検討する必要がある。

また、銃猟に比べて参画が容易なわな猟では、わなの巡回作業が課題である。毎日一回は仕掛けたわなを巡回して、獲物を確認する必要がある。その解決に向け、狩猟業界では IoT (Internet of Things : モノのインターネット化) 技術の導入が進められている。例を挙げると、株式会社 huntech では IoT 技術を活用した「スマートトラップ」の開発に成功した。市販のわなにセンサーチャグを装着することで、獲物が捕獲されると即座に管理者に通知されるシステムである。これによって、巡回による労力の減少が期待されている。IoT 技術の活用は、狩猟者の参画を促進させる要因となるのか研究する必要がある。

この他にも、女性狩猟者の実猟での問題点の整理、わな猟から銃猟へ移行する際の障壁、捕獲した獲物の利活用等についての研究も今後の課題と言える。銃猟のメリット及びデメリットの把握、獲物の自家消費以外の利活用にまつわる提案等が挙げられる。

5. 地域への提言

一般に狩猟者と言えば、獲物の命を奪う残酷な人たちという印象が強い。実際には法制度の下、狩猟者は厳格なルールに従って狩猟事業を行っている。シカ・イノシシの被害が急増する一方、狩猟者に対する一般市民の限差しは、未だに冷たいものである。その意識を解消しない限り、若い狩猟者の参画は厳しいと言える。

また、20代・30代の社会人が狩猟に参画できるような制度・環境づくりが必要である。日曜大工ならぬ「日曜獵師」のような、気軽に狩猟を実施することができる体制やコミュニティを創成することが求められる。例えば大学を卒業後、狩猟の技術を指導する講師を確保できれば、社会人となっても狩猟を継続しやすくなると考えられる。

さらに、シカ・イノシシの被害は中山間地域で多発するため、都市部の市民の認知度は未だに低い。食肉・装飾品など、獲物の利用増大化を考えるならば、都市部への情報発信・狩猟への参画の誘致も必要になるだろう。

6. 地域からの評価

本研究に携わっていただいた高山興業の勝又様曰く、「これからは若い人が狩猟事業に参画していくことが大事」と提言していた。狩猟における課題から判明する通り、狩猟者にも高齢化の波が押し寄せている。大学生が狩猟事業に参画できるような制度及び事業環境の整備が急務である。

静岡県内の若者に献血を普及させるための方策に関する研究

静岡産業大学経営学部 葉口ゼミ（研究室）

指導教員：准教授 葉口英子

参加学生：伊藤大和、山下隼人、山本裕洋、若杉雄人

青島優也、田中勇吏、績木椋太、松田裕太

杉山瑠星、大軒颯人、安藤唯

1 要約

近年、少子高齢化の進展に伴い、輸血用血液を必要とする高齢者が増加する一方で、若者世代の献血者が減少している。静岡県においても平成27年度と平成17年とを比較すると10~30代の献血者数は3万5100人以上減少した。こうした若者の献血者の減少は日本の医療にも大きく関わる深刻な問題である。本研究は、本学の大学生を対象とした献血に対する意識・行動調査をおこない、若者の献血者減少の背景や原因を探ると同時に、どうすれば若年層の献血者を増加できるか、献血に対する理解を深めてもらえるか、といった問題について調査し、考察した。その結果、若年層において献血の重要性は十分に認識しているながらも、その意識が実際の献血行為へと結びつく情報や場所・機会が乏しいこと、また採血行為に関するネガティブな感情やイメージが払拭できていないこと、加えて、赤十字血液センターによる献血活動を推進するさまざまな広報活動や取り組みが十分に周知されていないことが明らかとなった。これらの結果を踏まえ、方策を考案した。最後に何よりも重要なのは、自分たちも静岡県内の若者の一人として、当事者意識を持ち続け、献血推進活動を今後も継続することである。

2 研究の目的

本研究は、若年層の献血者減少の背景や原因を探るため、静岡県内の大学生を対象とした献血に対する意識・行動調査をおこなった上で、どうすれば若年層の献血者を増加できるか、また、献血に対する理解を深めてもらえるか、という問題に対して有効な施策を考案し、その回答を地域への提言とすることを目的とする。

3 研究の内容

本研究の主な内容は、①献血に関する基本的理解と全国と静岡県にみる若年層の献血者の推移を確認し、減少の背景や原因を探る。②本学の献血活動の過去と現況を把握する。③静岡県赤十字血液センター浜松事業所にて献血に対する現状や理解を深める。献血活動の実際を知る。④本学の大学生を対象に、献血に対する意識・行動調査をおこなう。⑤静岡県西部でおこなわれている献血活動の現場の様子、学生ボランティアとして活動する若者に聞き取り調査をおこなう。⑥献血の理解を深め、若者の献血者増加をいかに進めるか、「献血活動の推進のあり方」、「意識の醸成」、「効果的な広報のあり方」の三点に焦点をあて考察した。⑦自分たちもキャンパス内で献血に対する説明や呼びかけするといった取り組みをする。以上の手順で、本研究を遂行した。

4 研究の成果

(1) 当初の計画

- 平成29年10月 静岡県在住の10代後半から20代前半の若者の献血状況についての下調べ。過去の資料の収集。
平成29年10月 本学のキャンパスでおこなわれている献血活動や現況に対し、担当者に聞き取り、打ち合わせをおこなう。協力機関となる県内の赤十字血液センターの照会。過去の資料を基にデータにまとめる。
平成29年10月 アンケート調査項目の選定（項目については、県及び静岡県赤十字血液センター等の関係機関へ意見を求める）。
平成29年11月 静岡県在住の10代後半から20代前半の若者の献血状況についてのアンケート実施。
平成29年12月 アンケートの集計、聞き取り調査。
平成30年1月 報告書作成。
平成30年2月 協力機関および関係者への報告。

(2) 実際の内容

- 平成29年10月 静岡県在住の若年層の若者の献血状況の下調べ。過去の資料の収集。（A予定通り）
平成29年10月17日 本学の献血状況について、静岡県赤十字血液センター浜松事業所から来られている担当者

に聞き取りをおこなう。(A 予定通り)

平成 29 年 10 月 協力くださる県内の赤十字血液センター事業所の選定について静岡県健康福祉部薬事課担当者と相談。平成 29 年 10 月 本学保健センターの担当者に本学における過去の献血に関する聞き取りと過去の資料を基にデータをまとめる。(A 予定通り)

平成 29 年 10 月 アンケート調査項目の選定をおこなう(項目については、静岡県健康福祉部薬事課担当者及び静岡県赤十字血液センター等の関係機関へ意見を求める)(A 予定通り)

平成 29 年 11 月 静岡県赤十字血液センター浜松事業所でのセミナー参加と事業所の見学。(B 一部修正 理由:献血に対する理解や現場の様子を知るために)

平成 29 年 12 月 本学の学生を対象としたアンケート調査(190 名)を実施し、集計および分析をおこなうこと で、献血に対する意識・行動を分析する。(A 予定通り)

平成 29 年 12 月 イオンモール市野で献血に関するボランティア活動の見学とインタビューの実施。(B 一部修正 理由:大型ショッピングモールでおこなわれている献血活動や学生ボランティア活動を知る必要があると判断した活動を追加したため。)

平成 30 年 1 月 報告書作成(A 予定通り)

平成 30 年 1 月 学内で献血活動に対する理解や呼びかけとしてチラシを配布するなどして取り組む(B 一部修正 理由:実際のボランティア活動を実践する必要があると判断した活動を追加したため。)

平成 30 年 2 月 1 日 協力くださった赤十字血液センター浜松事業所にて報告会開催(A 予定通り)

(3) 実績・成果と課題

①現在、日本では 1 年間に約 488 万人(平成 27 年)の献血者がいる。しかし、この中で若年層の献血者は全国的に減少傾向にある。例えば、平成 21 年から平成 23 年における 10 代～30 代の献血者は減少し続いている(図 1)。2027 年には輸血が必要とされる血液が相当数不足することが危惧されている。今後、少子化で若者減少が進行する中、若者の献血者減少は益々深刻な問題となっている。

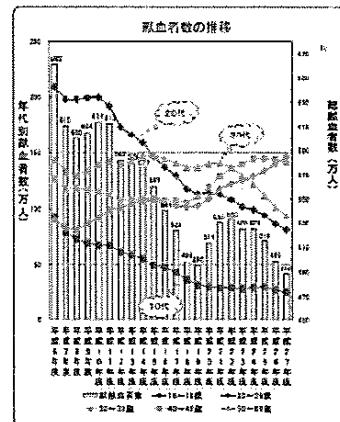


図 1 献血者数の推移 (厚生労働省)

②静岡産業大学では年に 2 回「献血計画」として、静岡県赤十字センターより献血車が来校し、学内で献血活動がおこなわれている。平成 19 年から平成 29 年までの本学の献血者数を確認した。その結果、平成 24 年前後には 140 名いたが、平成 28 年は 90 名となり、ここ数年本学での献血者もかなり減少している(図 2)。こうした原因や背景を探るためにもアンケート調査で学生の献血をめぐる意識・行動調査をする必要があると考えた。また 10 月 17 日に本学でおこなわれた献血計画での様子(図 3)を見学すると同時に、献血担当者の方に聞き取りをおこなった。主な減少原因を伺うと「食券と記念品のプレゼントをなくしたこともあるのではないか」とコメントいただいた。また「献血をおこなっていることをキャンパス内の学生に周知することの難しさを感じている」とのことであった。

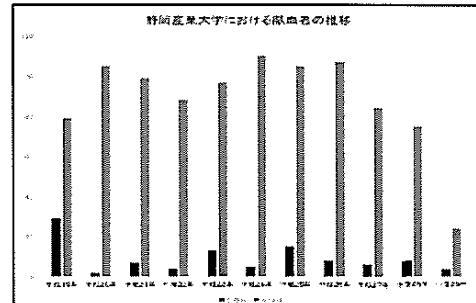


図 2 静岡産業大学経営学部の献血者数の推移

③静岡県赤十字血液センター浜松事業所を訪問し、セミナーをおこなっていただき、献血の重要性や基礎知識を学び、理解することができた(写真 1、2)。さらに若者の献血者を増やすためのアイデアや課題などについて、担当者の方に質問し答えていただいたり、意見交換するなど現場の貴重な話を伺うことができた。

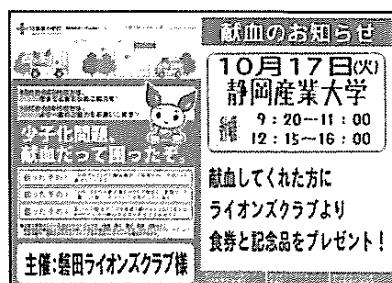


図 3 本学における献血活動

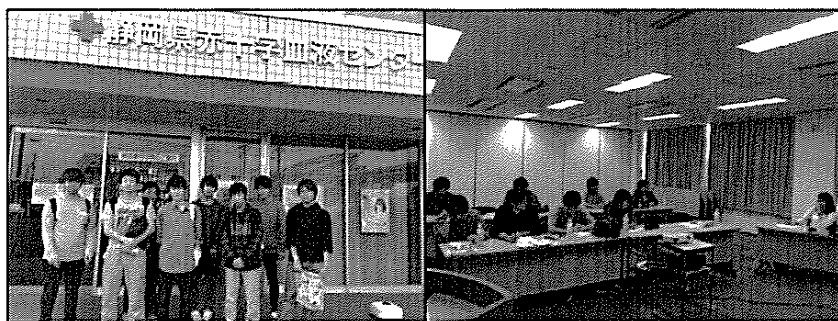


写真 1,2 静岡県赤十字血液センター浜松事業所にて献血セミナー受講と質問、意見交換

④12月9日、イオンモール市野店での献血活動と学生ボランティアの様子に加え、学生達がどのような気持ちでボランティアを行っているか、インタビューによる調査をおこなった。その結果、ボランティアに取り組む学生たちは、若年層への献血を促す重要性を明確に認識しており、各自が自主的に考え、活動していることがわかった。セミナー等や献血の重要性を理解した私たちも、大変共感を持てる意見を多く聞くことができた。活動に従事する学生たちは「若者に献血への関心、興味をもってもらうため、若年層の方々に実際に学生ボランティアの方が訴えることが重要だ。それまで関心のなかった方でも自分と近い年の人人がこうした活動に取り組んでいることを知ってもらい、それがきっかけとなり、献血への興味や関心に繋がる。」とのことだった。また「献血を行うことで救える命があり、それがやりがいになっている」と話し、「そのことを若年層の方に知ってもらいたい」と言っていた。これらの意見から、私たちも献血の重要性をしっかりと同年代に伝え、知つてもらう行動を起こす必要があると考え、そのためにはどのようなやり方が効果的か、ヒントを得た。



写真 3 ショッピングモールにおける献血活動と学生ボランティア

⑤静岡産業大学の学生アンケート（平成29年12月190名）の分析と考察をおこなった。以下主な項目についてのみ取り上げる。献血をしたことが「ある」は36%、「ない」が64%である。「献血したことがある人」について、その理由を問うと、「キャンパスに献血車がきていたから」69%、「家族・友人・先輩がしていたから」18%、「広報活動での必要性を知ったから」5%となった。結果、校内に献血車が来ていて、献血活動がおこなわれているといった身近な状況で献血しやすいタイミングが重要であるとわかった。一方、「献血したことがない人」の理由は、「機会（時間・場所）の不足」30%、「痛そう・怖い」38%、「他人がやっているから（自分がしなくてもよい）」8%、「その他」24%となった。つまり献血しやすい状況やタイミングも重要であるが、献血行為そのものに対するイメージ、例えば注射針を刺して血を採取することに対する「痛い」「怖い」といったイメージも献血者の減少に関連していることがわかった。

次に、「若者が献血をすることは重要だと考える」人は、約9割を占め、ほとんどの人が献血の重要性は認識できている。「献血に行こうと思えるタイミングや状況」は、「献血後にもらえる記念品が良ければ」と答えた人は72%であった。献血行為に見返りを求める人が7割はいることがわかる。次に「献血で救われた人の動画を見たり話を聞いたりしたことがある」は44%であった。私たちもセミナーで拝見した動画を見てることで、献血の重要性をさらに感じることができた。この割合が増加すれば、献血を身近に感じる人も増え、協力者も増加すると考える。「高校等の学校に献血車が来ていた」と答える人は93%にものぼる。このタイミングを逃さず、献血の重要性、献血で救われた人の話などを聞いた後、すぐに献血ができる状況にあれば献血をする人は増えると考えた。献血活動に挙げられる問題として、「時間がかかるてしまう事」や「やる機会がない」といった要因があることもアンケートから明らかとなった。

(4) 今後の改善点や対策

本研究を通じて、そもそも献血とは何か、なぜ献血は必要か、という基本的な知識や理解が若年層に十分に理解されていない点が献血者の減少の根本的な要因にあると考えた。当初は「献血を行ってもらう」ことに重きを

おいてアイデアを練ったが、途中から「献血の重要性」や「献血自体そのものを知つてもらえるにはどうしたらいいか」を考え、調査を進めていくことになった。また献血に関するアンケートの結果、献血が重要である認識は高いものの、無償で行う献血は、自ら意識を持って主体的に行うことであり、行動に移すには難しい点があることを痛感した。今回の調査結果から多くの課題や提案が出たものの、一番重要なのは、私たち若者自身が主体的に学び、行動し、取り組んでいかなければならぬことを強く感じた。そのため今後は自分たちも静岡県の若者として当事者意識を持ち、学内外での献血ボランティア活動を推進し、友人・知人にその活動を紹介したり、広めたいと考える（写真4,5）。

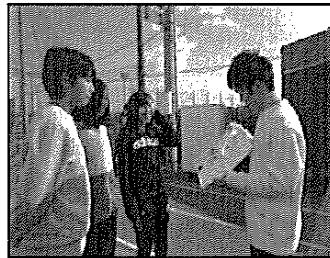


写真4,5 学内での献血推進活動

5 地域への提言（活動および広報他に関する提言）

5-1 活動の推進

今回の研究を通じて得られた成果を主に以下の2点に集約した。まず、大学生や若者が集まるイベント等を通じて、献血の大切さや献血場所を自分たちで伝えることである。例えば、磐田ではサッカー、ラグビー、サーフィンなど若者が集まるスポーツイベントがある。若者だけでなくイベントに来ている子どもたち、その親たちにも献血の大切さを伝える良い機会だと考える。次に、アンケートの結果から、大学生はキャンパスに献血車が来たときに、友人・先輩・後輩からの口コミで、何かプレゼントがある（本学ではライオネズクラブより食券）と献血行動を起こしやすいことがわかった。そのため学内での献血活動では、学生自身によるチラシ配布だけでなく、LINEやTwitterでこれらの情報を多くの学生に伝えることが効果的だと考える。こうした行動を静岡県内の各大学にも連携を促することで、静岡県内の若者の献血参加率の上昇が可能だと考える。

5-2 広報活動他

広報や周知の工夫も重要である。学内での献血活動は事前周知がポスターに限られる。そのためSNSやLINEを通じて、「今日大学に献血車が来ています」と伝え、献血で救われた命のエピソードや動画をリンクさせるといった工夫ができる。また、日本赤十字社発行の「献血Walker」というフリーペーパーでの記事には平成30年「はたちの献血」キャンペーンキャラクターLOVE in Action アンバサダーとして静岡県出身の広瀬すずを起用していた。こうした静岡県の若者にとって馴染みのある有名人やキャラクターを用いて、献血を身近に感じてもらうなど献血に対する「痛い」「怖い」イメージを和らげる広報活動も重要だと考える。加えて、献血したことがある人でも「時間がかかる」と感じることで、若者の献血参加率やイメージ上昇に繋がると考える。

6 地域からの評価

今回ご協力いただいた方や機関である静岡県赤十字血液センター浜松事業所、静岡県健康福祉部薬事課には報告会を2月1日に開催しご意見を伺う。特に途中経過にあって、献血活動の重要性を認識し、最終的に自分たちも献血活動に取り組み実践したこと、さらに引き続き静岡県内の若者の献血者を増やす活動の継続については、静岡県赤十字血液センター浜松事業所から評価いただき、今後も情報提供にご協力下さるとのことであった。

【主要参考文献・資料】

厚生労働省血液事業 (http://www.mhlw.go.jp/stf/seisaku/seisaku-0000105357_00001.html)

『愛のかたち献血』日本赤十字社 平成29年4月 他多数の日本赤十字社発行の献血活動関連冊子・印刷物

【謝辞】本研究の遂行にあたり多くの関係者、団体、学生にご理解とご協力をいただいた。静岡県赤十字血液センター浜松事業所事業課推進係名倉様、竹内様には献血活動に関する多くの情報を提供していただきました。また静岡県健康福祉部薬事課中西隆之様にはアンケート作成に貴重なご助言をいただきました。アンケートに協力してくれた静岡産業大学学生190名とインタビューに応じてくださった西部地域で献血活動を推進している学生ボランティアの皆さんに感謝申し上げます。

浜松市天竜区龍山町における民間口承文化財（昔話）の採録調査

静岡文化芸術大学 文化政策学部 二本松康宏ゼミ

指導教員：教授 二本松康宏

参加学生：稻葉夏鈴、岡田真由子、小林由芽、玉置明子、中谷文音、毛利とわ

1. 要 約

浜松市天竜区龍山町において民間口承文化財（昔話）を調査・採録し、その記録、保護・保存、そして公開と継承を目指す。

昔話は無形の文化財である。地域に伝わる伝説や家庭に受け継がれた昔話は、その土地に生きた人々の心と記憶の遺産であった。しかし、近年の加速度的な高齢化と過疎化によって昔話の伝承も急速に消え去ろうとしている。それは地域におけるコミュニティとアイデンティティの危機でもある。

二本松ゼミ（伝承文学）は、平成 26 年度から 3 年間にわたる同区水窪町での実績（『水窪のむかしばなし』『みさくぼの民話』『みさくぼの伝説と昔話』の刊行）を継承し、平成 29 年度は龍山町における昔話の採録調査を実施した。採録した語りは「方言のまま」「語り口のまま」に翻字する。そのなかから学術的価値、記録的価値を精査し、伝承地域等の解説を書き添えて、書籍（『たつやまの昔話と伝説』）として刊行する。

浜松市天竜区龍山町

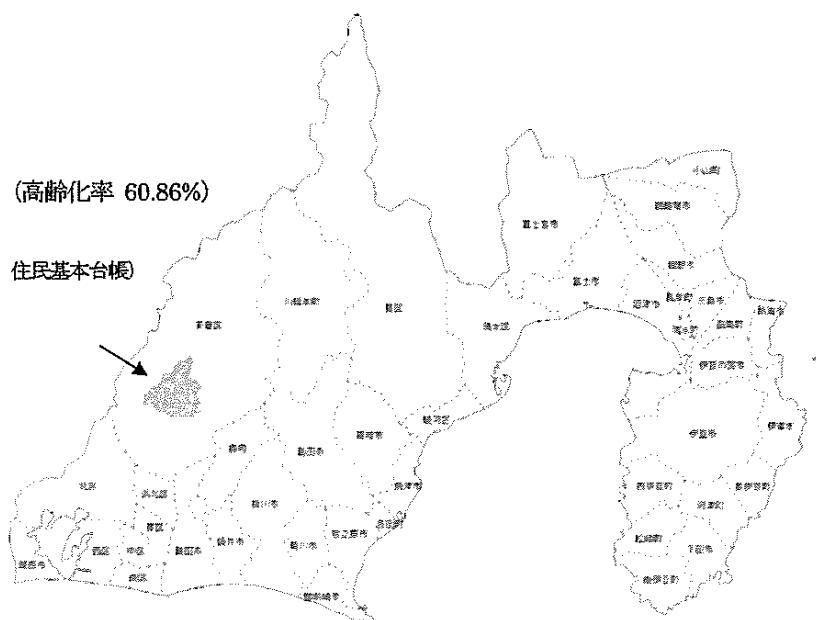
世帯数 330 世帯

人口 646 人

65 歳以上の人口 393 人（高齢化率 60.86%）

14 歳以下の人口 11 人

（平成 29 年 10 月 1 日 住民基本台帳）



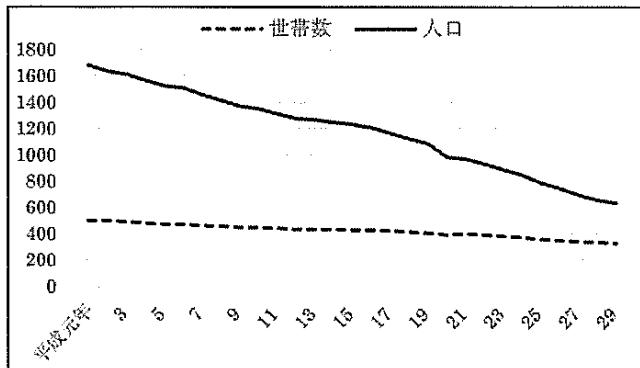
龍山の略年表

明治 34 年（1901）	龍川村のうち大嶺と戸倉、山香村のうち瀬尻と下平山が合併し、磐田郡龍山村が成立。
昭和 31 年（1956）	峰之沢鉱山の最盛期。秋葉ダムの建設特需。人口は 13,000 人を超える。
昭和 33 年（1958）	秋葉ダム、完成。人口は約 6,600 人まで減少。
昭和 45 年（1970）	峰之沢鉱山、閉山。人口は約 3,000 人まで減少。
平成 17 年（2005）	天竜市、春野町、佐久間町、水窪町など 2 市 8 町とともに浜松市へ編入。
平成 19 年（2007）	浜松市は政令指定都市に移行し、龍山町は天竜区龍山町となる。
平成 20 年（2008）	龍山中学校、閉校。人口が 1,000 人を下回る。
平成 26 年（2014）	龍山第一小学校、閉校

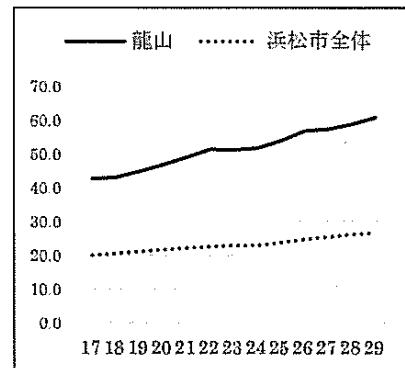
2. 研究の目的

(1) 龍山における高齢化と少子化

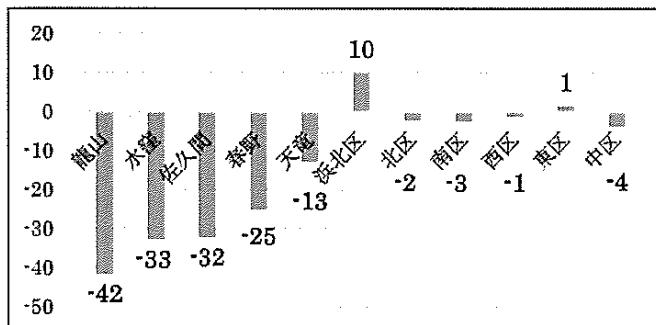
龍山町は人口 646 人のうち、65 歳以上の高齢者が 393 人、高齢化率は 60% を超える。静岡県内でも屈指の高齢化と過疎化が進んだ地域である。高齢者たちは孫と暮らすことが少なく、自らが幼いころに聞いた昔話を次世代に語る機会がないまま、その伝承はまさに消え去ろうとしている。



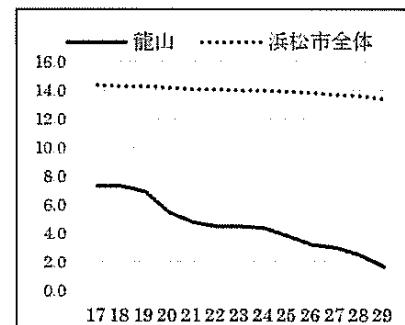
龍山の人口と世帯数の推移



65歳以上の人口比率（高齢化率）の推移
平成17年（浜松市への編入）～平成29年



浜松市旧市町村の人口の増減率
平成19年（政令指定都市への移行）～平成29年



14歳以下の人口比率（少子化率）の推移
平成17年（浜松市への編入）～平成29年

(2) 龍山における昔話の伝承状況とその課題

昭和 53 年 (1978) には、地域アイデンティティの再生を目的として、龍山村に伝わる伝説 27 話を収めた『ふるさと夜話』が旧龍山村教育委員会により刊行された。また平成 13 年 (2001) には村制 100 周年を記念し、その改訂版として『たつやま昔話』が刊行されている。しかし、残念なことに同書には掲載された 27 話はすべて「昔話」ではなく「伝説」に分類されるものであり、しかもすべて標準語によって語りが整えられている。そのため口承文化財の記録としての価値・評価は限定的と言わざるを得ない。

※ 伝説と昔話の違い

伝説 … 時代や場所を特定し、その土地では歴史的事実のように信じられている。伝説をよく知る人は、その地域で「古老」「ものしり」として知られているため、採録調査は比較的容易。一般的に男性の語り手が多い。
昔話 … 時代と場所を特定しない話（むかしむかしあるところに）。一般的に女性の語り手が多い。多くの場合、家庭内で「子どものおとぎ話」として語り継がれてきたため、他人の前で話すことは自分の教養のなさを露呈してしまう「恥ずかしいこと」とされがちで、なかなか表に出にくい。採録には高度な技術が必要。

3. 研究の内容

- (1) 2017年5月から2018年1月までの計画で龍山町全域での昔話の採録調査を実施する。
- (2) 龍山協働センター、社会福祉協議会龍山事務所との連携。地区の親睦会である「サロン活動」に参加。
- (3) 集会所における集団調査と自宅への戸別訪問。
- (4) 採録した話は記録価値などを精査したうえで「方言のまま」「語り口調のまま」に翻字・記録する。
- (5) 伝承の解説を書き添え、書籍として刊行する。



採録調査の記録

01	29年 5月 28日 (日)	第1回採訪	西川集会所	15	29年 10月 21日 (土)	補足調査 ①
02	29年 6月 7日 (火)	第2回採訪	下村会館	16	29年 10月 28日 (土)	補足調査 ②
03	29年 6月 10日 (土)	第3回採訪	戸別訪問／新道集会所	17	29年 11月 11日 (土)	補足調査 ③
04	29年 6月 17日 (土)	第4回採訪	白倉センターふれあい／生島集会所	18	29年 11月 18日 (土)	補足調査 ④
05	29年 6月 24日 (土)	第5回採訪	戸別訪問	19	29年 11月 19日 (日)	補足調査 ⑤
06	29年 6月 27日 (火)	第6回採訪	戸別訪問	20	29年 11月 20日 (月)	補足調査 ⑥
07	29年 7月 1日 (土)	第7回採訪	戸別訪問	21	29年 11月 27日 (月)	補足調査 ⑦
08	29年 7月 4日 (火)	第8回採訪	戸別訪問	22	29年 12月 2日 (土)	補足調査 ⑧
09	29年 7月 5日 (火)	第9回採訪	ドラゴンママ加工場	23	29年 12月 4日 (月)	補足調査 ⑨
10	29年 7月 8日 (土)	第10回採訪	戸別訪問	24	29年 12月 9日 (土)	補足調査 ⑩
11	29年 7月 22日 (土)	第11回採訪	龍山老人福祉センター／戸別訪問	25	29年 12月 17日 (日)	補足調査 ⑪
12	29年 7月 26日 (火)	第12回採訪	戸別訪問	26	29年 12月 18日 (月)	補足調査 ⑫
13	29年 7月 29日 (土)	第13回採訪	戸別訪問	27	29年 12月 24日 (日)	補足調査 ⑬
14	29年 8月 5日 (土)	第14回採訪	戸別訪問	28	29年 12月 25日 (月)	補足調査 ⑭
				29	30年 1月 14日 (日)	補足調査 ⑮
				30	30年 1月 15日 (月)	補足調査 ⑯
				31	30年 1月 20日 (土)	補足調査 ⑰

私たちのこだわり①…「語りのまま」「方言のまま」

近年では「語り部」として小学校や図書館などで昔話を語り聞かせる活動が広まっている。しかし、こうした活動では子どもにもわかりやすく標準語化され、あるいは再創作された話が大半を占めている。昔話は地域と家庭に伝えられた文化遺産である。標準語化や再創作は、いわば「文化財の改竄」に等しい行為である。未来に伝えなければならないのは「語りのまま」「方言のまま」の地域の文化遺産である。

私たちのこだわり②…書籍としての刊行

調査報告会やシンポジウムでの報告では、せいぜい100人か、多くとも200人ほどにしか調査報告を聴いていただけない。一過性の聴衆になってしまう。しかし、私たちが刊行してきた書籍はいずれも600部を刊行し、刊行後は1年以内に約500部が販売されている。公立図書館にも収蔵され、10年先も30年先も、ひょっとしたら100年先まで利用されることになる。



『水窪のむかしばなし』(平成 26 年度)

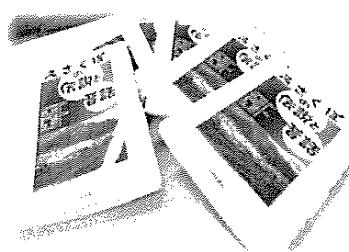
浜松市の 6 図書館をはじめとして県内 18 図書館に収蔵

『みさくぼの民話』(平成 27 年度)

浜松市の 15 図書館をはじめとして県内 33 図書館に収蔵

『みさくぼの伝説と昔話』(平成 28 年度)

浜松市の 12 図書館をはじめとして県内 31 図書館に収蔵



4. 研究の成果

(1) 当初の計画

龍山地区全域において採録調査を実施。採録した昔話は記録価値などを精査したうえで、「方言のまま」「語り口調のまま」に翻字・記録する。伝承の解説を書き添え、書籍として刊行する。

(2) 実際の内容とその理由

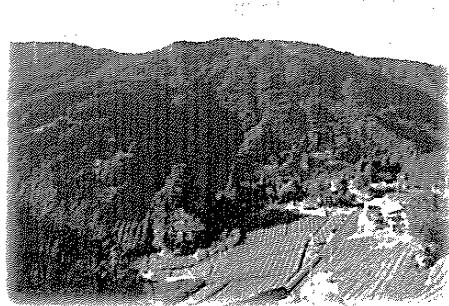
A（予定どおり）

(3) 実績・成果と課題

『たつやまの昔話と伝説』（二本松康宏監修、稻葉夏鈴・岡田真由子・小林由芽・玉置明子・中谷文音・毛利とわ編著、三弥井書店、2018年3月、定価1,000円（税別））を刊行予定。

(4) 今後の改善点や対策

龍山における民間口承文化財（昔話や伝説）の採録調査とその公開は今回で終了する。次年度からは春野地区において3ヶ年計画での採録調査を予定。集会所での集団調査ではどうしても男性の参加が多く、女性の参加が少なくなる傾向にある。昔話は男性よりも女性（母系・おばあちゃん）から伝播・伝承される傾向が指摘されており、採録でもできるだけ女性の語り手と出会うことが望ましい。



5. 地域への提言

龍山における民間口承文化財（昔話や伝説）の伝承は語り手たちの高齢化と急速な過疎化に伴って、いまや風前の灯火ともいいくべき状況にある。本来、昔話は世代を超えた地域文化の継承のためのコミュニケーション・ツールにもなり得るが、そもそも龍山には聴き手（つまり語り継ぐべき相手）としての役割を担はずの子どもが少なく、地域における昔話の継承はほぼ不可能と考えざるを得ない。

しかし、世代を超えた地域文化としての継承が望めないならば、同じ世代での相互継承を目指すことはどうであろうか。さいわい龍山では社会福祉協議会が斡旋する地域コミュニティの場として「サロン活動」が活発に催されている。そうしたサロン活動の場で、参加者たちが自分の聴き馴染んだ昔話や伝説を披露してはどうだろう。交互に語り手となり、聴き手となることで、龍山に暮らすことの誇りとアイデンティティに、もう一度、触れなおすことができるのではないか。『そういうえば、私はこんな話を聞いたことがあるけどね』と。私たちの採録調査がその“きっかけ”になれば嬉しい。

なお、私たちが刊行する『たつやまの昔話と伝説』は、浜松市をはじめとして全国の書店でも購入することができる。故郷・龍山を離れた人たちの想い出の縁（よすが）になればとも願っている。

6. 地域からの評価

上述のように昔話を他人の前で話すのは「恥ずかしいこと」と思われるがちである。その恥ずかしい話を語っていただくために、私たちの採録調査は、まず地域の人々の信頼を得るところから始めなければならない。たったひとこと、たとえば自宅の裏を流れる沢の名を確認するだけでも、けっして電話で問い合わせをしてはいけない。かならず現地へ赴き、ご自宅を訪ね、お会いして尋ねる。「そんなことのためにわざわざこんな所まで」と呆れるお年寄りも多いが、そうした地道な努力と誠意が、きっと信頼に繋がってゆく信じている。

はじめは私たちの採録調査を訝しがり、あるいは冷ややかでさえあったお年寄りたちが、会う数を重ねるごとに心を開いてくださるようになる。昔話を聴きに訪ねてきた学生たちを龍山のお年寄りたちは暖かく迎えてくださる。何日も前から学生が来るのを待っていてくださる方、私たちの活動が新聞に掲載されるたびに、我がことのように喜び、記事を切り抜いて保管していくくださる方も多い。私たちは「地域の活性化とは一線を画し」などと高邁な理念を掲げてはいるが、実のところ「待ってたよ」「また来てね」というお年寄りたちの言葉こそが、私たちの採録調査への何よりの評価である。

日露交流の原点の地としての静岡県—下田・富士・戸田—

日本大学 国際関係学部 安元ゼミ

指導教員: 教授 安元隆子

参加学生: 安元ゼミ 3年 20名

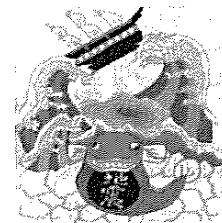
2年 12名 計 32名

【1】要約

鎖国の幕末期に、下田、富士、戸田で繰り広げられたブチャーチンはじめロシア人と日本人の、人と技術の交流の事実を広く世に知らせ、この物語を基に静岡県東部の駿河湾沿岸地域の活性化と日露交流の発展を図るために、日本語・ロシア語の絵本を作成した。

【2】研究の目的

本研究の目的は、鎖国の幕末期に下田、富士、戸田で繰り広げられた、ブチャーチンはじめロシア人と日本人の人と技術の交流の物語を広く世に知らせるために、中・高・大学生以上の読者を想定した日本語・ロシア語版の絵本を作成し、この物語を基に静岡県東部の駿河湾沿岸地域の活性化を図り、日露交流の発展に寄与することである。

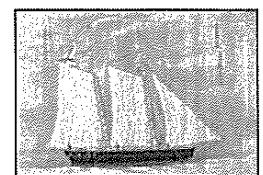
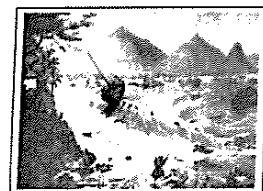


【3】研究の内容

①ディアナ号の沈没とヘダ号建造の歴史的事実

ブチャーチンら一行のディアナ号の沈没とヘダ号建造について、戸田村誌叢書『ヘダ号の建造—幕末における—』(戸田教育委員会)、及び、日本財団図書館「ディアナ号の軌跡」(中部海事広報協会)を中心に学んだ。以下歴史的事実の要約。

鎖国時代の江戸末期、1854年、日露和親条約を締結するために下田に来航したブチャーチンら一行は、交渉を始めて間もなく安政の大地震に伴う津波に襲われ、ディアナ号が破損(右上図)。修理のために伊豆の戸田に向かうが嵐に遭い、富士の宮島沖に漂着、遂に沈没してしまう。富士の人々に救出されたロシア人約500名は戸田に向かい、戸田の人々と共に代替船を建造する。これは日本初の本格的洋式帆船であり(右下図)、この時学んだ技術は日本の造船技術の近代化に大きく貢献した。この船はブチャーチンによりヘダ号と名付けられ、1855年、ロシア人は無事に帰国した。この間、日露和親条約も締結された。私たちが住む静岡県は、隣国・ロシアとの交流の原点なのである。



②現状の調査

一般市民の上記①の歴史についての認識度、及び、現状、先行研究(作品)について調査した。以下調査結果。

ヘダ号建造の物語を知っていますか？70人にアンケート

* 2017年10月24, 25日、20代男女70人にインターネットを使い実施

- ・はい(富士戸田下田出身)
- はい(富士戸田下田出身以外の静岡県出身)
- はい(静岡県以外の出身者)
- いいえ(富士戸田下田出身)
- いいえ(富士戸田下田出身以外の静岡県出身)
- いいえ(静岡県以外の出身者)

戸田号建造の物語を知っているのは
12%!
すばらしい国際交流の歴史があるにもかか
わらず、あまりにも認知度が低い！！

上記①の歴史的事実を知っている人は少ない。私たちの日本大学国際関係学部生でも日露和親条約の締結年は知っているがその背後にある日露の人と技術の交流については知らない者がほとんどであった。また、下田、富士、戸田が属する沼津市でも、この歴史を知っているのは一部の人に過ぎない。2017年10月24, 25日、20代男女70人に実施した安元ゼミのアンケートでは、ヘダ号建造の物語を知っているのは12%のみという結果だった。すばらしい国際交流の歴史があるにもかかわらず、あまりにも認知度が低いことがわかった。

下田、富士、戸田の各地域がこの歴史を物語化しているが、それぞれの地域を中心とした物語になっており、全体を包括したものがないこと

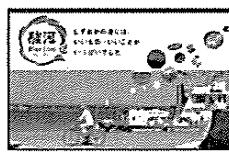


が判明した。(写真左から、下田:DVD『北からの黒船』、富士:絵本『ディアナ号がやってきた』、戸田:読み聞かせ『きずなを乗せた船』、)

また、日露交流の原点ともいべき静岡県であるにも関わらず、ロシアとの姉妹都市提携はなされていない。

駿河湾は2016年11月「世界で最も美しい湾クラブ」の加盟が認められた。静岡県では、「駿河ブルーライン」という駿河湾振興水産協議会のブランドができ、観光コースを提示しているが、ヘダ号に関連するものは含まれていないことを確認した。

そして、沼津では「ヘダ号再建プロジェクト」が始まり、ヘダ号の再建と世界遺産への追加登録を目指しているが、資金等の問題があり、実現にはまだ時間がかかりそうである。



③ 下田・戸田・富士研修

7月31日～8月1日、安元ゼミでは下田・戸田・富士の日露交流ゆかりの地を巡るフィールドワークを実施し、文献で学んだ幕末の日露交流を体感した。(写真は本報告書に添付した)

④ 科研費プログラム「ひらめき☆ときめきサイエンス」とロシア研修

科研費の研究成果を子どもたちに還元する「ひらめき☆ときめきサイエンス」に安元教授の企画「伊豆が日露交流の原点って知ってた？！ 国境を超えた友情の証・ヘダ号を作ろう！」が採択され、2017年8月22日、応募の結果選ばれた小学5, 6年生20名を対象に、

日本大学国際関係学部にて、ロシア文化に親しみ、ディアナ号の沈没とヘダ号建造の物語を紹介し、シンボルであるヘダ号をペーパークラフトで作るというプログラムが実施された。安元ゼミ生も助手として参加した。その際、子どもたちに物語を演じて日露両国人の気持ちを理解してもらおうと、絵本の原作となる台本を書き、ロシア語訳、挿絵の制作を行った。子どもたちは心を込めて物語を演じてくれ、ヘダ号の模型作りも熱心に取り組んでくれた。



9月7~14日に実施された安元ゼミのロシア研修では、サンクトペテルブルグに赴き、国立サンクトペテルブルグ大学、サンクトペテルブルグ国立文化大学、サンクトペテルブルグ 583番学校を訪問した。日露両国の学生が日本語とロシア語でこの物語を演じ、また、ペーパークラフトを行った。(写真上から「ひらめき☆ときめきサイエンス」にて子どもたちの朗読劇の様子、サンクトペテルブルグ国立文化大学での朗読劇の様子、左、完成したペーパークラフト・ヘダ号、右、ヘダ号色付けの様子、下、ロシアの子どもたちのヘダ号制作風景)



【4】研究の成果

以上を踏まえ日本語、ロシア語の絵本『日露交流の原点 ヘダ号建造の物語』を制作した。

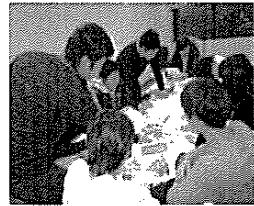
(1) 当初の計画

読者対象は小・中・高・大学生と成人とし、日露語を同ページに収め、p.70の雑誌体での絵本700冊を計画した。タイムスケジュールは、10月文献調査、11月中旬原稿完成、12月上旬挿絵完成、ロシア語翻訳完成、下旬編集、印刷へ、1月上旬印刷完成、中旬静岡県東部の小・中・高・大学・図書館等に発送。挿絵は絵画が得意なゼミ生の担当する予定であった。

(2) 実際の内容 [B] とその理由

読者対象を中学生以上、主としてゼミ生と同年齢の大学生に変更した。理由は、これまでに子ども向きの絵本はすでに作られていたためである。逆に大人が読む作品がないことを問題とし、対象を変更した。また、朗読劇の形ではなく読み物とし、内容は国際関係学部のゼミ生らしく、残された記録や証言を引用し、史実に基づき日露双方の視点から物語を構成することとした。そして、日本人の行った人道的支援だけでなくロシア人も日本人の救援を行ったことを取り上げ、かつ、道徳的な主題のみに収れんさせないこと、また、ロシアは日本に近代的造船技術を教えたことを伝え、日露両国を対等に記すことに主眼を置いた。内容については戸田造船郷土資料博物館の筒井久美子学芸員に検証していただいた。ロシア語翻訳は内田香織さん、松崎ユリヤさん、サンクトペテルブルグ国立文化大学のリューバ先生にお願いした。なお、ロシア語は日本語より長くなるため、日露両国語を同ページに組み込

むと字数が多くなり読書欲の減退が懸念されること、挿絵が生かされなくなることから、編集の段階で、急きょ別冊とすることにした。その結果、ページ数が減少したのと同時に、2種類の印刷となり、予算の点から冊数を削減せざるを得なくなった。挿絵は、上手なことよりもゼミ生が力を合わせ全員で心を込めて作ることを優先し、全員で分担、制作した。絵が上手な者も下手な者もいたが、上手な者が添削カバーし、結果、手作り感のある冊子となった。(写真は編集作業の様子)



(3) 実績・成果と課題



『日露交流の原点 ヘダ号建造の物語』日本語版
(p. 44 表紙、裏表紙含む) (左写真) 300 冊、ロシア語版は *У истоков японо-российских отношений История строительства корабля «Хэда»* (p.42 日本語版末尾の添付マップ「プチャーチンゆかりの地を巡る旅」を省略)
100 冊が 1月末に完成した。2月初めに日本語版は静岡県東部の中・高校・大学、及び公共図書館等に送付する。ロシアの大学には 2月末、安元教授が訪露の際に届け、学生たちには 9月の安元ゼミロシア研修の際に持参する予定である。

(4) 今後の改善点や対策

8月初めに本企画の採択を知らされたが、8月に科研費プログラムの実施補助、9月はロシア研修があり、11月には「富士山麓 A&S フェア」の発表準備に追われ、計画通りに実施することが出来なかった。内容の変更の可能性もあることを肝に銘じ、早めに計画を遂行したい。

【5】地域への提言

絵本製作の他に、安元ゼミで作成した下田・富士・戸田を巡り、日露交流の物語を体感できる観光マップ(地域特有の富士山の景色や特産物、楽しみ方を掲載。ロシア語版も作成しロシア人観光客誘致を図る)を精緻化し、日露交流の物語を基とした歴史観光コースを作り、観光客を誘致する。また、安元ゼミで作ったペーパークラフト・ヘダ号を製品化し、戸田で制作する場を作れば遠足や修学旅行など教育的な旅行も誘致できる。全国の日露交流ゆかりの地のサミットを開催するなど、この歴史を基に地域を活性化し、全国を牽引する可能性があることを喚起し、ロシアとの姉妹都市提携を進め、更なる国際化を図るべきである。

【6】地域からの評価

安元ゼミは、沼津市観光課から日露交流を基にした観光開発の協力要請を受けた。また、2017年11月の「富士山麓 A&S フェア」では、本企画の絵本製作を含めた「"ヘダ号"の物語を生かした駿河湾地域の活性化一下田・富士・戸田を中心に—」が最優秀賞を受賞した。

「浜松地域の農産物を活用した「地産地食」の子ども食堂と「地域のためのおしごと体験」を通して行う子どもの貧困支援」

浜松学院大学 現代コミュニケーション学部
渡部ゼミ（研究室）
指導教員：教授 渡部いづみ
参加学生：鈴木ステラ、藤丸力也、嘉戸泉美、
北川一磨、蔵増慶太、徳井瑞紀、柳田千尋、
山本彩久乃、千葉龍羅、大場敦弥、平岩慶一朗、
中村瀬里香、森下慧哉

1. 要約

昨年度の助成事業として採択された子ども食堂の開催にプラスする形で、「地域のためのお仕事体験」を実施した。子ども達には、本ゼミで5年余り続けているHGU朝市のスタッフとして、介護付き老人ホームのお年寄や地域住民を相手に、品出しや接客、会計などの仕事を体験してもらった。学生達がフォローしながらも、基本的には子ども達に仕事を任せ、責任を持って仕事を行うことの大変さと、同時に顧客から感謝された時の達成感を与えられるよう導いた。仕事体験後は、朝市で扱う地元産の野菜や果物を使用し、学生達と一緒にバーベキューを行い、楽しみながら、学びながらの食事を提供した。

2. 研究の目的

子どもの貧困対策として有効だとされる子ども食堂であるが、昨年度は、偏見などにより参加してもらう子ども達を集めることが困難であった。それでも、子ども食堂を必要としている子どもや親は必ずいると確信し、単に食事を提供するのではなく、一緒に仕事をしたり、役割を持たせたりしながら食事を楽しませることに注力した。同時に職業体験をさせることで、社会のしくみを学び、働く意義ややりがいを持たせ、勉学や進学への意欲に繋げ、貧困の連鎖が起き難い環境作りをする。

3. 研究の内容

第1回 2018年9月16日（土）浜名湖エデンの園（介護付き老人ホーム）出張HGU朝市での仕事体験とバーベキュー（雨天のため、屋内で実施）参加者 子ども10名、学生13名、教員

第2回 2018年10月15日（日）渚園キャンプ場 バーベキュー（雨天であったが屋外〈屋根付き〉で実施） 参加者 子ども8名、学生9名、教員

第3回 2018年11月3日（金）浜松学院大学 HGU朝市での仕事体験とバーベキュー（浜松学院大学キャンパス内）参加者 子ども12名、学生11名、教員

昨年度は、子ども食堂に参加してもらう子どもの募集が非常に大変だったため、その点について、対策を行った。小学校の放課後教室や、地域の放課後教室などへのチラシの配布を行うと同時に、民生委員に協力を呼びかけ、参加希望者を確保した。また、仕事体験やバーベキューを実施することで、イベント性を高め、子ども食堂を貧困や孤食というイメージに結び付けないよう工夫した。第1回目のエデンの園では、お年寄を相手に販売を行ったことから、顧客にも喜んでもらうことができ、子ども達も感

謝の言葉を受け、非常に達成感を感じられたようであった。初めての出張朝市で、悪天候の中、移動や準備などが大変であったが、会場となったエデンの園からも非常に歓迎された。朝市後にバーベキューを行うにあたり、校舎内であったため、ホットプレートを使用したバーベキューとなった。屋外でのバーベキューを予定していたが、天候が回復しないため、屋内での開催となり、配線や調理など、非常に大変であったが、子ども達は楽しんでいた。

第2回目も、悪天候であったが、渚園キャンプ場でバーベキューのみを実施した。静岡新聞の取材があり、子ども達も記者に質問されるなど、特別な体験となった。強い雨の中の実施であったため、学生は大変であったが、キャンプ場でのバーベキューとのことで、イベント性が増し、子ども達には好評であった。新聞に活動が掲載されるにあたって、次回の募集なども記事にしてもらえ、より広い告知を行うことができた。

第3回目は、祝日で大学が休みであることを利用して、いつもHGU朝市を行っているキャンパス内で仕事体験とバーベキューを実施した。朝市の顧客が多く訪れたことで、子ども達の仕事も多岐に渡り、張り切って作業を行っていた。また、中日、静岡のふたつの新聞社に取材してもらい、地域に広くこの活動を広めることができた。子ども達も、いきいきと仕事体験とバーベキューに参加していた。

4. 研究の成果

昨年度の課題であった参加者の募集については、早くから民生委員と連携をとっていたため、比較的計画通りに進めることができたが、地域の祭りと開催日が重なった時に、非常に募集に苦労した。また、当初は、バーベキューを全て屋外で開催する予定であったが、昨年の9月から11月にかけては、異常気象のせいで雨天の日が多く、この不安定な天気が最大の課題であった。しかし、予定の回数をこなすことができ、参加した子ども達やその保護者、民生委員からは、「楽しかった。」、「是非また参加したい。」、「大学生とのふれ合いが、非常に嬉しかったようだ。」と好評であった。

子ども食堂で食事を提供するだけでなく、職業体験を取り入れたことで、子どもが役割を持ちながら参加できたことは、昨年度の活動を一步前進させたように感じる。

当ゼミで、地域住民のために5年以上続けているHGU朝市というフィールドを活用できたことで、学生の自信にもつながり、同時に子ども食堂や職業体験という活動を地域住民にも知ってもらう機会となつた。

昨年度のように、食事を提供するだけでなく、職業体験やバーベキューで、子ども達が学生と共に過ごし、作業する時間が増え、活動の当初の目的でもあった子ども達の想い出作りという点においても、成果を出すことができた。

また、地域の老人ホームで開催できたことで、施設の管理者、入居者に子どもの貧困、孤食など、地域内でも経済格差による課題があることを認識してもらうことができ、昨年度と比較し、周囲を巻き込んだ活動に発展させることができたことは意義深い。

5. 地域への提言

2015年に日本政府が発表した数値では、子どもの貧困率は16.3%（2012年）で実際に約6人に1人が貧困状態とされる子どもという計算になる。子どもの貧困が、わが国で注目されるようになって10年近く経過するが、子どもの貧困率は年々増え続けている。2016年にユニセフが、貧困世帯の子どもと標準的世帯の子どもの格差がどの程度広がっているのかを調査したところ日本は、先進41ヶ国中、34位であることがわかった。韓国15位、アメリカ30位という順位を見れば、わが国の貧困がいかに深刻であるか理解できる。

しかし、この6人に1人の貧困状態というのは、あくまで全国平均であり、10人に1人の地域もあれば、

2人に1人の地域もある。この地域格差が、子どもの貧困問題を複雑にしている。貧困率が低い地域では、「この豊かな日本で食べられない子どもがいるのか？」と感じる人も多く、子どもの貧困が他人事であり、関心も危機感も低い。そのような中で、自分達が生活している浜松地域でも、子どもの貧困や孤食という問題が起きているということを、多くの人に知ってもらい、ともすれば深く潜行しがちな地域課題を、大学や学生、地域住民が共有することが重要である。子どもの貧困対策は、社会の優先課題であり、他人事ではなく「自分事」として地域全体、社会全体で考えていかなければならない問題である。

6. 地域からの評価

「子ども食堂と子どもの職業体験」といテーマに関心を持ったメディアに、計3回の取材を行ってもらえたことで、経済格差による子どもの貧困や孤食という問題が、比較的豊かであるとされる浜松地域にも起こっているということを、広く発信することができた。記事を読んだという反響もあり、微力ではあるが、啓発活動という役割も担えたのではないか。参加した子ども達も、働くということを楽しく体験することができ、保護者からも、子どもが職業体験について報告してくれたと前向きな評価を頂いた。朝市の顧客達にも、子ども食堂や職業体験を理解してもらうきっかけとなり、続けての開催を依頼されるなど、好評であった。

成果報告書

「大学を拠点にスポーツを通して地域の子どもの居場所づくりの実践的研究 —子どもが変われば親も変わる」

浜松学院大学 現代コミュニケーション学部 大野木ゼミ

指導教員：教授 大野木龍太郎

参加学生：浅井茉莉乃、岩崎茜、大石楓、勝亦彩、清水淳哉、
高橋拓也、竹下雅、外山群、中野智晴、良知航

1 要約

浜松学院大学大野木ゼミナールでは、放課後の地域の子どもの居場所づくりについての実践的な研究をおこなった。

第一に、子どもの放課後の実情を探るために、浜松市中区広沢小学校区、富塚小学校区、追分小学校区の保護者を対象とした子どもの放課後の過ごし方に関するアンケート調査、ならびに子どもの居場所づくりに取り組む「富士市NPOゆめまちねっと」への視察をおこなった。その結果、大半の保護者は今の子どもたちは自分が子どもの時と比べて、外遊びをしなくなっていると感じており、放課後の外遊びは重要だと認識されているにも関わらず、半数近くの子どもが放課後の外遊びをする時間が持てていないことが明らかとなつた。

第二に、大学近隣に住む小学生を対象に、スポーツ活動をベースとした子どもの居場所づくり「スマイルスポーツクラブ」（略称 スマスポ）に取り組んだ。毎週月曜日の夕方時間を通して継続的な開催、夏冬の合宿、親子で楽しめるイベントを実施してきた。子どもの遊び場の提供と同時に、子どもが遊べる時間と空間と仲間の必要性を自覚してもらえるように保護者の意識に働きかけを試みた。

本研究で行ったスマスポの活動を通して、参加する子どもたちにとっての居心地の良い雰囲気づくり、保護者との信頼関係を築くことができた。本活動で得た研究実績は、冊子として学校や地域に配布を行い、地域全体に子どもの遊びと三間（時間・空間・仲間）の重要性の啓発に役立てていく。

2 研究の目的

地域の子どもの放課後の過ごし方が変容している。三つの間（時間・空間・仲間）をどう子どもに保証していくかが問われている。大学という安全な場所で、平日の放課後に、学校や学年や性別を問わず、大学生が子どもに寄り添いながら、スポーツを通しての居場所づくりの視点から実践的に探究する。地域の子どもの放課後の過ごし方を、スポーツを通しての居場所づくりの視点から実践的に探究する。

3 研究の内容

大学近隣に住む小学生を対象に、大学（主として体育館）を拠点に、大学生がスタッフとなり、スポーツ活動や伝承遊び（鬼ごっこがメイン）をベースに、子どもの居場所づくりを進める。その中で、そこに子どもをあずける保護者の意識に働きかけ、放課後に子どもが遊べる時間と空間と仲間の必要性を自覚してもらえるように働きかけを行う。

4 研究の成果

（1）当初の計画

本研究は、放課後の子どもの過ごし方の実態を把握するための調査と放課後の居場所づくりの2つを目標に掲げ、下記のような計画を試みた。放課後の居場所づくりでは、毎週

平日（月曜日）の放課後（16：00～18：00）の通常活動としての「スマスプ」に含め親子で楽しんでもらえるようなイベント型の活動「スマイル合宿」「親子スマイル」の実施も当初から計画をおこなった。

【当初の年間活動計画】

4月	スマイルスポーツクラブの準備	24日スタート
5月	通常活動、ゼミ研修合宿（富士市NPOゆめまちねっと）	
6月	通常活動、親子スマイル、合宿下見	6月あたり
7月	通常活動	
8月	スマスプ合宿（2泊3日）西伊豆やまびこ荘・水窪田楽の里	
9月	ゼミ合宿 浜松青少年の家（1泊2日）	
10月	通常活動・アンケート作成	
11月	通常活動、学園祭スマイル祭り 富士市NPOゆめまちねっと合宿 アンケート実施	
12月	通常活動、親子スマイル②（佐鳴湖ウォーキング）、アンケート集計	
1月	通常活動、アンケート分析	
2月	通常活動、冬合宿 長野方面（1泊2日）	
3月	通常活動、親子スマイル③	

（2）実際の内容：B（一部修正）

実際には、下記のような日程で進められた。実施時期は、学生のスケジュールとの調整により一部変更があったが、問題なく実施することができた。年間を通して、放課後の居場所づくりに取り組んできた。10月～12月には、アンケート調査や視察をおこない、子どもの放課後の過ごし方の実態の把握をおこなった。

【実際の年間活動実績】

4月	スマイルスポーツクラブの準備	24日スタート
5月	通常活動（5回）	
6月	通常活動（4回）、親子スマスプ①（親子運動会）	
7月	通常活動（4回）、スマイル夏合宿下見	
8月	スマスプ夏合宿（2泊3日・掛川ならここの里）	
9月	親子スマスプ②（インターナショナルスクールの子ども達との交流）	
10月	通常活動（4回）	
11月	通常活動（4回）、学園祭「よろずやのぎちゃん」 ゼミ研修合宿（富士市NPOゆめまちねっと）、アンケート作成	
12月	通常活動（3回）、親子スマスプ③（佐鳴湖ウォークラン） アンケート実施・集計	
1月	通常活動（3回）、親子スマスプ④（こま保護者講演会）アンケート分析	
2月	通常活動（3回）、スマイル冬合宿1泊2日（長野県高遠少年自然の家）	

（3）実績・成果と課題

① 放課後の子どもたちの実態調査

（ア）アンケート調査

12月1日～15日に、浜松市中区広沢地区（広沢小、追分小、富塚小）の子どもの保護者（n=500）を対象とした放課後の過ごし方に関するアンケート調査をおこなった。アンケートの結果は、以下のとおりである。（郵送による回収226世帯）

- 放課後の子どもの過ごし方で足りていないものを尋ねたところ、「足りている」と回答したのが27%だったのに対して、足りていないものは、「時間」（29%）「空間」

(27%) 「仲間」 (8%) という結果になった。

- 「公園や広場、公園で友達と外遊びする」ことへの問い合わせに対し、79%の親が「非常に重要だと思う」「重要だと思う」と回答した。にもかかわらず、実際に遊んでいる時間は、「ほとんどない」「週に1回程度」と回答した保護者が78%もいた。
- 子どもがよく過ごす場所として「自分の家」(83.2%)が最も多かった。対して、「公園、空き地、広場など」(13.6%)、「学校の校庭や体育館」(9.5%)と外で過ごしている子どもが少なかった。
- 「親の世代に比較して、子どもは外で遊ばなくなりましたか」と尋ねたところ約9割が「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と答えた。その理由として、「学習塾や習い事、クラブ活動などが忙しいため」「電子ゲームをして過ごす子どもが増えたから」「不審者や犯罪等、地域が安全でなくなったから」という順に多かった。
- 子どもの放課後に何が必要かという質問では、「子どもが自由に、安全に遊べるような広場や公園」(84.1%)「子どもが自由に、安全に遊べるような児童館や公民館などの屋内施設」(39.1%)が求められていることが分かった。

(イ) 「富士市NPOゆめまちねっと」への視察

11月18日・19日に、子どもたちの居場所づくりに取り組む「富士市NPOゆめまちねっと」への視察を行った。視察内容として、「冒険遊び場たごっこパーク」への見学・参加と「おもしろ荘」での研修会に参加をした。「冒険遊び場たごっこパーク」では、あいにくの雨天だったが、たき火の前で子どもと話したり、川で魚を捕りに行ったりと子どもたちが自由に過ごしている姿が見受けられた。「おもしろ荘」での研修会では、このNPOを運営する渡部達也さんから、児童虐待や貧困、いじめなど生きづらさを感じてしまう子どもたちへの居場所の必要性をゼミナールの学生に講演していただいた。

調査・視察を行い、子どもたち遊び場の重要性と必要性を知ることができた。アンケートの結果、子どもの外遊びを行うことが、重要だと考えられているにも関わらず、親世代の時に比べて少なくなってきた。子どもたちが、安心して遊べるような居場所が、保護者にとっても子どもたちにとっても、身近にあることが、求められている。

② 放課後の居場所づくり

(ア) 「スマイルスポーツクラブ」の実施

毎週月曜日の16:30~18:00に地域の子どもたちに遊び場を提供する取り組み「スマイルスポーツクラブ」を実施した。スマスボで行った遊びとしては、かけっこやリレー、鬼ごっこや氷鬼、ドッジボール等のスポーツと伝承遊びを実施した。1日に行う内容は、実施前に大学生が話し合って決めた。時には、子どもたちの希望に応えた遊びや、子どもたちとルールを作った遊びなども行った。運営に至ってもすべての役割（保護者対応や司会進行、広報等も）を大学生の中でローテーションで行い、責任を全うした。

(イ) 親子スマスボ・スマスボ合宿などのイベント

スマイルスポーツでは、年に7, 8回「親子スマスボ」「スマスボ合宿」などのイベント



【スマイルスポーツの様子】

型の活動にも取り組んだ。「親子スマスボ」は、子どもと保護者が一緒に身体を動かせるような活動にしていくことを意識して企画・運営をおこなった。「親子合同運動会」や「流しそうめん」「餅つき大会」「伝承遊びでつながる」など通常の活動とは異なり、保護者が積極的に参加してもらえるような活動を行うことができた。

「スマイル合宿」では、夏と冬の2回実施した。子どもが自然とふれあいや友達と助け合うことで、帰ってきたときの子どもの変化を感じてもらえるような内容を行った。

今年度のスマスボは、計30回実施し、毎回約35名程度の子どもが参加してくれた。定期的な遊び場の提供は、参加する子どもたちにとって、1週間の中の楽しみになっており、自分自身を認めてくれる心理的な居場所にもなっている。スタッフとして行う大学生は、子どもたちに飾り気なく自然体で接しているため、子どもたちに信頼できる関係性が築けている。(ナナメの関係)

保護者の方には、一定時間安心した環境に預けられるため、自分自身の時間が持つことができていると評価していただいた。また「親子スマスボ」等のイベント行事で、たくさんの方が参加してもらうことができた。一部では保護者同士のつながりも生まれ、スマイルスポーツクラブの場が多少はあるが、子育てのゆとりを生み出していると考えられる。

(4) 今後の改善点や対策

「スマイルスポーツクラブ」の今後の課題として、子どもたちの時間への対応が課題としてあげられる。スマスボを行う月曜日の16:30~18:00に行なうことは、決まった時間に、決まった場所で、遊び場が開かれるということは、参加する子どもや預ける保護者にとってゆとりを持たせられる。その一方で、月曜日に習い事をする子どもへの参加が難しい。別の時間にも設けることを検討する必要があるだろう。

また、場所の提供の難しさも活動を通じて見えてきた。スマイルスポーツは、安全面から屋内環境で行ってきた。一方で地域においては子どもの外遊びを求める声が多くあり、子どもにとっても自由性が高く、より伸び伸びとして運動することができる。今後は、イベント型の活動で戸外の外遊びを積極的に増やしていきたい。

5 地域への提言

スマスボに参加している保護者も、子どもが地域で遊べる場所だけでなく、仲間もいないこともかなり気にしており、学校を問わず、学年を問わず、子どもが集まるスマスボは子どもにとっても保護者にとっても貴重な居場所になっている。こうした場所を、学生が運営協力者となり、地域にどう増やしていくかが課題である。

環境の変容により、子どもたちの外遊びをおこなえる時間が以前に比べ、減ってきている。公園や学校の校庭は、第三者の苦情、ルールやマナー等によって、以前のように外遊びができなくなってきた。子どもたちが自由に安全に遊ぶことができる生活環境の在り方について、行政や地域住民の中で考えていく場をつくることが重要である。

6 地域からの評価

「スマイルスポーツクラブ」のイベント「親子スマスボ」では、いつもスマスボに参加してくれる方以外にも、多くの地域の方に参加していただいた。子どもだけでなく保護者の方にも、スポーツや伝承遊びを楽しんでもらえた。

今回行ったアンケート調査・スマイルスポーツの成果は、冊子にまとめ、各小学校や地域に配布をおこない、子どもの放課後の居場所づくりの重要性・必要性へのさらなる啓発活動に役立てていきたい。

学生主体のボランティアセンターの設置

静岡県立大学 国際関係学部 津富宏ゼミ（研究室）

指導教員：津富宏教授

参加学生：美和千里、日野聰子、小沼友姫、鴻野祐

吉田真友、倉田笑莉、田島美智子

1. 要約

東日本大震災をきっかけに、大学が組織的にボランティア活動を行うことができる役割を担うボランティアセンターの必要性が高まってきた。本学にも学生が主体となって活動し、周辺地域の方々と協働できるような地域交流型のボランティアセンターの設置を提案したいと考える。そこで、本学教職員および学生が、ボランティアセンターの先進事例、特にその役割や効果等を学び意見交換を行うことによって、本学におけるボランティアセンター設置に向けた動きを加速させるため、「静岡県立大学ボランティアセンター構想フォーラム」を企画した。本報告書では、本フォーラムの内容とその成果、課題についてまとめ、地域への提言として今後の活動計画を提示する。

2. 研究の目的

東日本大震災において本学が主体になってボランティア活動ができなかったこと、ゼミの活動から地域や大学内での困り事を集めて共有する場がほしいと考えるようになったこと、そして本学にある既存のサークルで活動する学生を多角的にサポートする場が必要だと考えるようになったことの3つの理由から、本学にもボランティアセンター（以下、VC）が必要であると考えるようになった。

そこで、本研究では、地域社会でボランティア活動を行いたい若者をサポートする拠点であるVCを構想するための提案を行うことを目的とする。本ゼミでは、すでに、明治学院大学、神奈川大学、桜美林大学におけるVCを視察し、提案のための基礎調査を行ってきた。

静岡県立大学は公立大学として、地域に根付き、地域の人々と関わる機会を学生に提供する責務を負っていると考える。そこで、本研究においては、学生自身が運営するVCを設置し、地域に住むすべての方と協働するボランティア活動を企画、参加できるような、地域交流型のVCを提案したい。

3. 研究の内容

- ①VCに関心のある学生を集めて、これまでの基礎調査を基にVCの具体的な設置案を考える。
- ②VCのキックオフとして、本学教職員および学生がVCの先進事例、特にその役割や効果等を学び意見交換を行い、本学におけるVC設置に向けた動きを加速させるためのイベントを開催する。

4. 研究の成果

(1) 当初の計画

VCのキックオフとして、学内の学生団体と協力し、地域の方と学生が交流する場を設けて、地域が何を必要とし学生がどんなことを考えているのかを共有し、活動のきっかけをつくるためのイベントを行う。

(2) 実際の内容（Aは予定どおり、Bは一部修正、Cは中止など）とその理由

B. 一部修正

（理由） まずは、大学内におけるVCの知名度を上げ、VCを本学にも設立したいと

思ってくれる学生、教職員を増やすことが第一ステップであると考え、「静岡県立大学ボランティアセンター構想フォーラム」を企画し、明治学院大学、神奈川大学、大阪府立大学のVCに関わる教職員、学生に来ていただき、勉強の場、または交流の場を作った。また地域の方にも呼び掛け、VCについて知ってもらうようにした。以下にまとめる。

【静岡県立大学ボランティアセンター構想フォーラム】

日時：平成29年12月16日 13:00～20:00

場所：静岡県立大学国際関係学部棟1階 3108教室

内容：①第一部フォーラム

・他大学VC発表

(明治学院大学、神奈川大学、大阪府立大学)

・静岡県立大学サークル紹介

(リトルワールドキャンプ、SSS、YEC、NGOあおい、環境サークルCO-CO)

・VC構想案発表

②第二部交流会 その場で深めたい話題について語り合う。

③第三部親睦会 軽食を取りながら、他大学の学生・教職員と親睦を深める。

(3) 実績・成果と課題

参加人数：本学学生 13名 本学教職員12名 他大学の学生・教職員11名

社会人 5名 スタッフ 7名

計 48 名

①第一部フォーラム

I. 明治学院大学（教職員3名、学生3名）

➢ 設立経緯

1995年阪神淡路大震災の際、学生の自発的なボランティア活動を大学としてバックアップしようという形で1998年横浜キャンパス、続いて白金キャンパスにVCを設立するに至った。

➢ 体制

センター長1名センター長補佐2名の教員、専任職員各キャンパス4名、ボランティアコーディネーターを2名配置するなど、教職員が手厚く配置されている。

➢ 目的

①ボランティア活動と教育との連携を強化、②学生の自主的な活動を応援すること、③地域社会との協働によるボランティアの推進、④ボランティアに関する情報提供⑤学生メンバーが活動すること。

➢ 活動内容

地域のお祭りに参加するなど地域活動行っている学生や主に外国の問題について考え、支援を行う海外プログラム事業を行う学生、ボルネオ島の自然保護をするなどの海外支援を行う学生など、様々なセクションがある。

II. 大阪府立大学（職員1名、学生2名）

➢ 設立経緯

2007年3月からサークル活動として「V-Mate」がスタートした。“ボランティアの輪を広げるためのボランティア”チームとして発足し、大学公認の機関としての「大学ボランティアセンター」設立を目指した。そして2009年に大学からの許可を得て2つ目のステージ「大阪府立大学ボランティアセンター」が発足し、大学のボランティア相談窓口として、学生と地域の声を受け止め、両者を結び、活動を後押しした。その後2016年に現在の「大阪府立大学ボランティア・市民活動センターV-station」が発足した。

➤ 体制

学生課学生サポートグループ内に設置されており、センター長1名、副センター長1名、ボランティアコーディネーター1名ほか、学生スタッフ約15名、ピクトリー仮面1名で活動している。

➤ 目的

学生と市民とが一緒になって地域の課題解決・理想実現を進められるように、協働の場づくりを行う。そして、市民活動に関する社会資源として大学の潜在能力の發揮し、他の支援機関にはない強みを生み出すことである。

➤ 活動内容

ボランティアコーディネーターとしてボランティア募集者と活動者の仲介を行うことと、地域交流促進等を目指したプログラムを企画すること。例えば、地元の小学校PTAから子どもたちと夏休みに何かできないかと依頼を受け、夏祭りをPTAの方と一緒に実現させた。

III. 神奈川大学（教員1名、学生1名）

➤ 設立経緯

もともとは教職課程の学生のために、生涯学習の教員たちが中心になって学校ボランティアとして、インターンや研修を兼ねて学生を派遣することをやってきた。その後横浜市から事業委託を受け、内容を充実させる形になった。

➤ 体制

ボランティア活動支援室の学生スタッフとアルバイトスタッフが1名大学から配置されている。コーディネーターではなく様々な事務をしてくれている。

➤ 目的

学生がボランティア活動を通じて社会や地域に貢献することで、自らと社会の繋がりを理解し、より広い視野を獲得すること。

➤ 活動内容

熊本募金やカンボジアのサービスラーニング、古本回収など多岐に及んでいる。8月の六神祭では、学校の学食を貸し切り様々なサークルと地域住民100名ほど呼んで、食事や企画を通して地域の方と学生の交流を行った。また、学生は地域活動だけでなくコーディネーションを主に行っており、変動はあるものの月30～50名程度の学生の相談に乗っている。

IV. 静岡県立大学VC構想案発表

1. 学生への支援

- ・学生個人を学内外のボランティアの機会とつなぐ
- ・県大をベースに活動するサークルの中間支援
- ・学生と地域を繋ぐような県大生によるプロジェクトの実施

2. 大学として企画するボランティア活動

- ・県外で災害が起きた時、学生ボランティアを派遣する
- ・県大自身が被災した時、学生ボランティアをコーディネートする

3. ボランティア活動に関する教育の提供

- ・ボランティア活動に関する授業の提供
- ・学外でのボランティア活動が単位認定されるような授業の提供

②交流会

はじめに第一部の感想共有を行い、その後その場で今話したい話題をそれぞれ考えてもらった。出た問い合わせとして、「県大生(学内)のサポートについて」「活動の原動力、その伝え方について」「ボランティアする学生を増やすためには?なぜボランティアをしないの

か?」「ボランティアセンターの主体とは?」「大学間の連携の在り方は?」などが挙げられ、それぞれ話したい人が集まり議論した。

③今後の課題

- ・地域に密着していくのか、総合的な支援をするのか、大学の資源を鑑みてみる。
- ・メリットだけでなく、デメリットもしつかり考えていく。
- ・多方面に目配りしていると思うが、どこに重点を置くかも考えたほうがいい。
- ・既存のボランティアサークルの把握
- ・特にインシデント直後はボランティアがかえって行うことが無くなってしまう等問題があるため、過去にボランティア先でどんなことが起こったのか学ばないといけない。

(4) 今後の改善点や対策

地域の方の呼びかけが不十分で、人數を集めることができなかつたので、今後の改善策としてより地域の方に重点を置いた会を開き、VCを地域の方の意見を反映させながら作っていきたい。

5. 地域への提言

今後本学が中心となって地域活性化ができるよう、地域の方の困りごとを共有できるVCを設置するべく活動していく。以下、今後の活動の流れである。

①平成29年度

- ・学生主導のVCの構想を固める
- ・活動内容・方法を考える
- ・地域の方との交流の場を設け、VC構想の案をもらう。
- ・場所をもらうための交渉を行う

②平成30年度

- ・学生主導のVCを試行運営する。
 - ・学内の組織（例 健康保健センター 障害学生支援室）と連携する。
 - ・一般学生の支援、学内サークルの支援、地域との連携を主な活動内容とする。
 - ・大学側での設置構想を固めるため、学生と教員からなる設置委員会をつくる。
- メンバー：学長、このフォーラムに来ていただいた先生数名、上記委員会の学生
- ・VCの目的、場所、人員配置、活動内容などを固めて学内決裁を通す。
 - ・スタッフの採用を行う

③平成31年度

発足する

6. 地域からの評価

今回参加していただいた地域の方の中で、実際にボランティアをしてくれる学生を募集している方が来ており、自分たちだけではうまく学生を集めることができずに困っているとの話を受けた。VCの話を聞いて、困りごとを共有できる場ができるることは非常にうれしいことだとの意見をいただいた。また、ボランティアをしている地域の方でない方も、VC設置に向けて頑張ってほしいと同意してくれた。今回は地域の方の参加が少なかったが、地域の方もVC設置に肯定的であることが分かった。

成果報告書

重度認知症患者と地域在住学生との定期的な交流の試み ～音楽ケア訪問～

静岡英和学院大学 人間社会学部 山田ゼミ（研究室）

指導教員：教授 山田美代子

参加学生：櫻田優奈、赤嶺珠羅、石原里依子、加藤杏名、近桃音
杉本千帆、多々良太郎、増井あき子、水谷友香

1. 要約

わが国の高齢化は年々進み、介護保険制度が施行された平成12年度3月末に要介護・要支援認定者数は256万人であったが、平成27年9月末時点では約640万人となっている（厚生労働省、2017）。一方、2017年4月から「介護予防・日常生活支援総合事業」が全国で開始され、その方針は、要介護状態となつても住み慣れた地域で自分らしい生活を送ることができるであり、地域の支え合いにより在宅で過ごすことを目指すものである。

前述の介護保険制度の入所施設は、現在「特養」と「老健」である。「老健」は1986年老人保健法が改正され、病院と特養の機能をあわせもつた「中間施設」として制度化されたものであるが、2012年に介護療養型医療施設増設の廃止が決定してから「老健」にもターミナルケアが求められるようになり、中間施設としての機能は脆弱となり、重度認知症の利用者が増え看とりをする施設へと変化してきている。

そこで本研究は、誰もが自分らしい生活を最後までしたいと望みながらも施設での生活を余儀なくされ、社会との交流の少ない老健A施設で生活する重度認知症高齢者と、その近隣に位置する大学生が定期的に音楽を中心としたプログラムの提供をしながら交流する（以下、音楽ケア訪問と称する）ことで、お互いがどのようなつながりをもち成長し合えるのかを明らかにし、今後の地域課題について検討した報告である。

2. 研究の目的

高齢者施設での生活を余儀なくされ社会との交流の少ない重度認知症高齢者と地域福祉を学ぶ学生が、定期的な「音楽を中心としたプログラムによる交流（音楽ケア訪問）」を通して、互いの気持ちを共有し合い成長できることを目的とする。

3. 研究の内容

【本研究実施の経緯】

山田ゼミは、指導教員の専門である「音楽療法」に関心があり保育者や社会福祉士を目指し地域福祉を学ぶ学生が集まっている。また、「音楽療法Ⅰ」の科目履修生の社会人学生（看護師）は授業において、御自分の勤務する老健A施設で音楽療法を実践する際の目標として、次の三つを挙げた。

1. 認知症になつても、できることがあるという自信をもつことができる。
2. 自分の世界から他者とのつながりをもつ世界を楽しむことができる。
3. やってもらうという受け身から（認知症になつても人を）楽しませる役割をもつことができる。

そこで、その社会人受講生の勤務する老健A施設とゼミ生が連携をしながら音楽ケア訪問を計画し、次の日程で行うことになった。

【実施時期】：平成29年5月1日～平成30年1月31日

音楽ケア訪問日：平成29年5月31日、6月28日、7月26日、10月25日、11月29日

平成30年1月17日 計6日（7セッション）

訪問の前後には、施設からの情報により対象者理解に努め、毎回プログラムを検討し、実践、振り返りを行った。

【調査】本研究では認知症に配慮した音楽ケアプログラムを検討し、実施しながら次の二つのアンケート調査

を実施した。

1. 音楽ケア訪問の開始前と後に4年ゼミ生がゼミ生（3年生中心）を対象にアンケートを実施し、認知症や高齢者施設に対するイメージの変化について明らかにする。
2. 最終セッション後、A老健施設職員（ケアスタッフ）を対象にアンケートを実施し、実際に「音楽ケア訪問」をどのように感じているのかを明らかにする。

ゼミ生が地域住民として近隣のA施設（老健）に定期的訪問をし交流することで、学生自身どのように成長し、施設利用者においても具体的な変化がみられたのか、また音楽ケア訪問を職員はどのように感じているのかを調べ、施設で暮らす重度認知症高齢者と学生が、音楽を通して繋がる「音楽ケア」のもつ意味や可能性について検討した。

4. 研究の成果

1) 当初の計画

次の5つの内容を掲げていたので、結果を含め報告する。

i. 音楽ケアにおいて認知症を患っている人が出来ること、自己表現をすることができる。・・・ 実施

「手拍子したり、笑顔が見られる」「南米に幼少期暮らしていた方が、セッションの中で挨拶をスペイン語ですると「ブエノスアイレス」の意味を説明したり職員の名前をアルファベットで書いた」「学生に労いの言葉掛けをする」「終了後、エレベーター前まで見送りに来る」「学生・職員・利用者の気持ちが一つになり、普段と違う姿が見られる」「ポスターを見て、『英和学院大学』と大声で読み上げニヤニヤする」等、終了後報告があった。

また、「最前列に座りたがる」「大きな声で「good！」と声掛けする」「故郷の風景を詳しく話し始める」「徘徊する方が、音楽している間は座っていられる」「1番の歌詞に続いて、3番の歌詞をリードされる」その他に職員からの報告に「音楽ケア訪問の夜、いつもと違ってよく寝ていた」とあった。

ii. 介護職員にとって、音楽ケアは気分転換になり楽しみ場を共有することができる。・・・・ 実施

アンケート結果（添付資料）より、7名中6名が、「はい」と回答している。「いいえ」と回答した1名は、勤務日が音楽ケア訪問と一致せず一度も音楽ケア訪問を経験していなかった。

iii. 学生が自身も老い、将来家族（祖父母や両親または兄弟等）にケアが必要になることを想定し、老いについての理解を深め偏見や差別をなくすことができる。・・・・・ 実施

学生の振り返りに「病気や障害に対して偏見があり、施設利用者さんと交流するのは初め恐かったが、音楽を通して交流することで、利用者さんが笑顔で気さくに話してくれたので、差別意識がなくなった」という記述があった。

iv. 地域に暮らす高齢者と学生が交流することにより、家族や施設職員の他に今後地域住民の出来ることを模索することが出来る。・・・・・ 実施

今回施設の一人の職員（看護師）との共同で実施した。施設全体での取り組みに至っていないが、導入としては成果があったと思われる。

v. 福祉学科の学生に限らず一般学生においても、地域における福祉を担う人材教育に役立てることができる。・・・・・ 中止

今回は山田ゼミ生のみの実践で、他学科や他学部に通う福祉学科以外に在籍する学生は参加していない。その理由は、今回初めての試みで施設側の受け止めはどうであるか終了後のアンケート結果が得られるまで分からなかった為、他学科学生まで広げなかった。今後可能であれば声をかけ一緒に実施していきたい。

2) 実際の内容（Aは予定どおり、Bは一部修正、Cは中止など）とその理由

1) のi～vに記載した通りである。

3) 実績・成果と課題

本研究は高齢者施設での生活を余儀なくされ社会との交流の少ない重度認知症高齢者と地域福祉を学ぶ学生が、定期的な「音楽ケア訪問」を通して、豊かな気持ちを共有し成長し合えることが、目的であった。

学生にとってどのように成長したと思われるか質問したところ、9名中2名の学生が祖父母の介護と重ね合わせ「施設という場で何がその人にとって幸せなのか」、また「自ら知り歩み寄ることの大切さ」を体験的に考えるようになったと回答している。他7名は施設利用者と関わることで「自分の心が穏やかになった」「人前に出るのは苦手だったが、自ら話しかけ、人と交流することが楽しくなった」「利用者の口ずさんだりリズムを取る様子を見て緊張がほぐれ、楽しめた」「実体験の学びは自身の成長に繋がっている」「相手のことを考えて行動できるようになった」「人前に出るのが苦手だったが、克服し自分を出すことが出来た」と大半の学生が、成長出来た点を挙げている。参加高齢者においても記録用映像から、また職員対象のアンケートの記述より実際どのような様子であったかエピソード記述から明らかになった(4-1)-iの通り)。看とりの場面においてもその人らしい時間を過ごせたことが報告されている。これらのことから、学生においても高齢者においても評価に値する結果を得ることができたと言える。

4) 今後の改善点や対策

今回の取り組みは、学生と大学の授業を履修した一人の職員を中心として進めてきたが、今後は施設全体の取り組みに移行出来れば、と考えている。そのためには、話し合いの機会をもち職員にとって望ましい導入方法について検討し進めていきたい。

5. 地域への提言

高齢者施設で働く職員は、約1年間実施してきた「音楽ケア訪問」への関心は高かったが、実際に「音楽ケア」を実施してみたいか?の問い合わせに対しては消極的であることが明らかになった。今後、施設全体の取り組みになっていってほしいと考えるが、福祉学科学生以外の参加も呼び掛け、地域全体で広く実施していきたいので、他施設においても施設利用者と地域住民との交流可能な「音楽ケア訪問」の実施の機会を与えてほしい。

6. 地域からの評価

「音楽ケア訪問」に対して、職員の関心は高く、施設利用者にとっても職員にとっても利点がある、という評価は得られた。また、職員による重度認知症高齢者の様々なエピソードや興味深い記述内容から、日常的に関わられる介護現場からの評価が得られたと思われる。

以上

公益社団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアム

〒420-0839 静岡市葵区鷹匠 3-6-1

静岡県総合研修所もくせい会館

電話 054-254-1818

E-mail: mail@fujinokuni-consortium.or.jp